三人兄弟

あるどごろに三人の男の子供がえであったどやな。したっけ一番目の男の一郎は弓を射るごどばり好きで、弓の名人て言わえだりする位弓好きで、あど家のごどしねでって言うか、してけねがったんだど。

二番目のは次郎ど言って、猫の画書ぐごどばり好きで、猫の画書けば何十枚も何百枚も書ぐやらして、とにかく何にもしねがったんだど。

三番目の三郎は、これまたなっても読むも書ぐも知らねぼんくらで、人このええ子であったんだどやな。

そえで親達もとにかくこうゆうことびらださたぐつだて、ましゃがわねはで（割に合ない）、んがだどごがさ行って、まんまけって、焼めしひとつずづしょわしぇで、家から勘当してしまったんだどや。

銘々は焼めしたがで方々さ行ったば、一郎兄がある村さ行ったば、人だがりあって、何するどごだでろ、何があるがって聞いだどごろ、村の人が、

「ん、あごによ、村のはずれさ柿の木あるべ。あの柿の木さひとつなってるあの柿の実を、弓一発でバタッと落どしぇだ人が、この村の庄屋のひとり娘の婿になるえな」

一郎は弓の名人だものだがら、

「したら俺どごやらしてみでけれな」

って言ったば、

「なんのなんの、これ程いた村人ひとりも落どしぇねな、お前みでな他所者したって、落どしぇだものでね。止めろ、止めろ」

と言われだども、

「そうでね、一度やらしぇでけれ」

どて一郎が言って射ったば、一発でバヂッと落ぢで、その村の庄屋の婿になって、立身したんだどやって。

二番目の次郎は、猫の絵じっぱりしょって行ったば、行ったば、ある所のある村さ行ったば、人だかりあったから、

「何事があったなだ」

と聞いたば、

「村の掟で毎年祭りになれば家々さ、白羽の矢立でらえれば、そごな家の娘どご、祭りの日、お宮さ上げねばねぐなって、今年は庄屋のひとり娘のどさ、この矢が立だえで、晩げそごのお宮さ行がねばねあだな。人間上げねば、ここの田だの畑の作なってもとらえねはで、上げねばねあだがら、皆集まって、さわで、泣でるあだ」

って。次郎が、

「んだらおえどご身代りにやってけれ」

って、

「そえなばもっけの幸だごど。したら頼む」

どて、晩げ次郎どご大きた櫃さ入れで、村の人ヤンサ、ヤンサどかづで行って、お宮さ行って置いで来たんだどや。

したきゃ、夜中なったけ、大嵐吹できて、お宮もなもミッチミッチめがしぇで、ガラガラめがしぇで、屋根もぼっこえるばりなって、

「アー来たな、蓋上げだら」

って待ぢがまえでえだば、化物が蓋さたんぐつだんだど。そうしたところが、どごがら来たもんだが、猫何匹だが居だやら。ワヤワヤって来て、その化物さたぐつで、皆かっちゃぐやら、噛るやらして格闘したば、化物逃げで行ってしまったって。

そえから夜明げるどご見で、次郎が下りで行って、

「これこれ、こやしてあった」
って話したんだど。村人みな集めで、
「したら行って見よう」
どて、皆、鎌どが鍬たげで、そのお宮さ行ったば、なるほどそごさ血んだらかっこうなって、血だらして山奥さ逃げで行ったようだがら、皆その血ただして山の奥さ行ったけ、大ぎだ山の岩の洞さ、なばが苦しやら、化物がウンウンど唸っていだどご見つけで、みんなして引っぱり出して殺しだど。そえからど言うものは、不吉だどど、不作もねくて、次郎もそごな家のむごになって、安楽に暮らしたと言うごどだって。
三番目の、なっても物知らずの三郎が、ぶらっと家から焼めしひとつしょって出はって行ったば行ったば、学校下りの子供だ二、三人して、何が揃まえでえるもんだ。
「おめだ何してるどごだ」
「これこの蜂、あまり俺どご刺すはで、蜂の針ご抜いでやるどて、こうやってんだ」
って言うから、
「んめだ学校の先生から〃生きものいじめるな〃って聞いてたでろ、生きものいじめるんでねど。俺その蜂買うはで、おれっちゃその蜂売れ」
って、じぇんこなんぼがやったやら。したら子供だ喜んで、そのじぇんこ持って、さっさど行ってしまったって。三郎が、
「蜂、蜂、んが、おれが今来ねば針ご抜がえで殺さえるどごであったな。俺に助けられだんだあんで放してやるはでな、俺の恩忘えんなよ」
って蜂どご放してやったどよ。

また、ずっとずっと行ったば、学校のことびら二、三人して何かやってだって。
「これこれ、おめだ何するどごだ」
「おえだ今、川から鮒こつかめで、鮒こやぎして喰うどごだ」
って火こ焚でだおな。
「おめだぢ学校の先生から生きものをいじめるなって聞いだでしょう。おれどごさこの鮒こ売れ。じぇんこでな」
ってじぇんこやったば、うって喜んで子供だ、じぇんこ持って行ってしまったて。
「鮒こ、鮒こ、今おれごご来ねば焼がれで命ねがったで。おれ来たおかげで命助かったはで、川さ放してやるはで、俺の恩忘えるな」
ってまた断って放してやったって。
またずっと行ったば学校のことびらだ、四、五人して何がでらしてだ。
「こらこら何してるどごだ」
「猿こ余り人どごさ悪さするはで、猿こかやぎ煮で喰うどごだ」
言うだでおな。
「あいやァ、駄目、駄目、おめだ学校から帰りに先生どっから、生ぎものいじめるなって聞いだでろ、な。おえっちゃその猿こ売れな」
ってまたじぇんこやって、その子だ喜んで、じぇんこただで（持って）行ったし、
「猿こ、猿こ、俺ごご通らねば、おめえっつに殺されでしまったなだ。肝こも取らえで死んでしまっだはて、おめ山さ行げな。おかげで命助かったんだがら俺の恩忘れるなよ」
と猿どさも断って放してやったど。
またずっとしばらぐしばらぐして或る村さ行ったけ人だがりあって、集まっていたもんだがら、

「何あるどごだ」
って聞いだば、
「こごの村の庄屋の山が余りおっきだ（大きな）山で、杉の木なんぼあるやら分がらねがら、杉の木なんぼあるが残らず勘定して来た人が、この庄屋の娘の婿になるにえなだって。誰行っても仲々その杉どご勘定するごど出来ねっくって今騒でるどごだ」
「んだらおえどごやってけれ」
ったば、
「なに、これ程の村の人でも勘定しぇねもの、んがみでんた他所者来たって、なに勘定しぇだもんだって」
「そでね、まんつ（先ず）やってけれ」
って、こんだ三郎がその山さ行ってみだどごろが、ソニャー、おっきもおっきごど、何日かがればその山歩ぐにええもんだやら、何がほど杉あるが分がらねがったて。
「サァ、こえなば困ったな」
って、デコッとその山さ尻下ろして坐って目つぶって黙って考えでだば、ブーンて蜂来たって。
「三万三六〇〇本、ブーン」
て来たでおな。
「アレ、何が蜂言ったな、アレ何だでろ、も一回来えばええな」
って言ったばまた、
「三万三六〇〇本、ブーン」
「ハッ、こりゃ蜂だ。三万三六〇〇本で忘えねな、良し三万三六〇〇本、良し三万三六〇〇本」
って頭さ入れで、口がら離えねで村さ下りで来て、
「分がったが」
て聞がえで、
「あゝ分がりました」
「なんぼあるっけ」
「三万三六〇〇本あります」
ったば、
「確かだが」
「ハイ、確かにあります」
って、そえって（そのように）言ったど。
「んだらこの竿たげで（持って）行って、あの川の真中さこの竿立でで来え」
「アーア」
と思ったども、その竿かつで行ったって。したけなるほど川あって、その真中さ橋もねば、泳んでも行がえね、しぇば何としてあの川の真中さこの竿立でればえっけな（いいだろう）、黙ってそさ腰掛げでえだば、鮒ど来て、
「おいおい、何したんだ」
「んーン、えまこの川の真中させ、この竿立でねばねども、何がして立でればええやら、橋もねくってな」
「んーン、それぐれぇ、お安いご用だ、お安いご用だ、一寸、目つぶれ」
って、それで目つぶって目あげだば、ちゃーんと橋かがってえだって。竿も橋もちゃーんと立だでだって。
「アー、えがったじゃ、えがったじゃ」
って、また村さ下りで来て、
「立でで来ました」
村から見れば、ちゃーんとその竿立だって見るあだでおな。

「あゝ、えがった。こんだ（今度）したらその竿の先さ旗立でで来え」
って、
「はい」
ってまたそさ行ったけ、おれ何として登って、その先さ旗立でで来えばええでろなって目つぶってだば、猿こ来たでおの。
「おいおい、何するどごだ」
「ア、おえ、この竿の先さこの旗立でねばねども、登っても行げねし、何としぇばええど思って考えでだ」
「んーン、そんだどお安いご用だ。俺立でてけらぁ」
って、シュッシュッシュッと登って旗こ立でてけだでおの。
「あゝ、えがったな、えがったな」
って、また村さ下りで、
「立でで来ました」
村の者だ旗立だったな見でで、
「おゝ、良ぐ立てだ、良ぐ立てだ」
って皆で喜んで、三郎はその村の庄屋の娘の婿になったど。なっても出来ね三郎も立身したけどや。
そう言う話であったな。トッピンカラリ、サンショノミ。